

基調講演②

露日関係の現状と方向性

ロシア連邦外務省第3アジア局露日経済交流部長 セルゲイ・ヤーセネフ

私たちは日本を善良な隣人として、また、アジア太平洋地域におけるパートナーとしてみており、近年の日ロ関係のダイナミックな進展を歓迎する。そのプロセスを大いに促進しているのが、活発な政治対話、特にハイレベルでの対話である。両国の指導者たちは定期的に会っており、プーチン大統領と野田首相は、ロスカボスでのG20サミットやウラジオストクのAPECサミットで会談を行った。対日関係はロシアの外交政策の優先事項において依然として必然的なものであるとロシア側は明言しているし、日本のパートナーたちも同じ立場を取っていると思う。

日ロ経済関係については、世界的な金融経済危機が貿易取引高に悪影響を及ぼしたにもかかわらず、ここ数年間、たいへん力強い動きを見せている。2011年に二国間貿易高は30%の成長を見せ、約300億ドルに上った。2012年1～

8月には日ロ貿易高は227億ドルとなり、前年同期比を17%上回っている。日本の税関統計を踏まえると、わが国のデータは少なめだが、これは水産物等、統計に入らないものがあるためだ。いずれにせよ、2012年は約310億ドルという記録的な貿易高を達成すると見込んでいる。これはEU、中国との貿易の伸び率と比べても、大変力強い数字になっている。日本の対ロ累積投資額は最近、100億ドルを突破した。

戦略的分野でいま最も重要なのは、エネルギー産業である。サハリン1、サハリン2に代表される大型プロジェクトが実施され、サハリン2の枠内でロシア初のLNG工場が順調に操業している。この工場の製品は日本の天然ガス輸入の約10%を占めている。ウラジオストクでは新たなLNGおよびガス化学工場の建設が検討されている。さら

に、トヨタ、日産、三菱という世界をリードする自動車メーカーがロシア国内に組立工場をつくり、世界的な建設機械メーカーとして知られるコマツもロシアで積極的に活動している。9月6日、ウラジオストクAPECサミット会期中に、マツダとロシアの自動車メーカー、ソラーズ（Sollers）の合弁工場の開所式が盛大に行われた。

同時に、日ロ経済交流の可能性がまだ十分に生かされていないことは明らかだ。まず、投資・貿易の規模を機械的に増やすのではなく、それらの質的改善について考える必要がある。世界的技術立国の一つである日本から、ロシアはハイテク産業への投資を期待している。従来のエネルギーおよび工業に加えて、できる限りのイノベーション的な要素の強化に、将来の日ロ両国の経済関係がある。経済のイノベーション的発展への移行は我々の長期的路線であり、省エネなどハイテク産業での日本との緊密な協力は非常に重要な課題だと考えている。これに関する政府間の文書、近代化分野での協力プログラムを作成中だ。

5月3日の原子力の平和利用に関する日ロ政府間協力協定の発効は、原子力分野での協力を拡大する大きな可能性を開くものである。双方がこの合意のために非常に努力した。今や、大型経済プロジェクトの実現のための道が開かれた。具体的には、原発用ウランのロシアにおける濃縮、ロシア極東の港を経由したウランの日本への輸送、第三国での合同プロジェクトへの参画がある。

残念ながら、2011年3月11日の原子力発電所事故の結果、しばらくの間は原子力分野での協力の規模は当初予定されていたものとは違って来るであろう。我々は、原発の段階的廃止の立場を「2030年までのエネルギー戦略」に盛り込んだ日本政府の決定を尊重する。これは非常に難しい選択だったと理解する。しかし、この分野での我々の協力の場がなくなったわけではない。原子力産業で活動する日本企業は世界市場への進出を続けており、日本の技術には依然として需要がある。

また、原子力発電の将来について日本国内で議論が続いており、具体的な決定の採択はエネルギー確保、安全、経済成長の維持に関するあらゆる問題の検討・分析の後になるであろう。我々は将来を楽観視している。原子力の平和的利用は、近代化における日本との連携の方向性の一つである。近代化およびイノベーションは我々の協力の代名詞になるはずであり、原子力分野はこの活動における優先事項の一つだ。

また、ロシアはチェルノブイリ原発事故の処理の経験に関する情報を日本側に提供する用意がある。日本側に関心があれば、我々は福島第1原発の現場で実際の作業に参加するだろう。

我々は、ウラジオストクAPEC首脳会議で重要な文書が調印されたことに満足している。それらは、漁業分野の協定、ガスパロムと資源エネルギー庁の間の沿海地方におけるLNG工場建設に関する覚書、さらに丸紅が参加するクラスノヤルスクにおける大規模木材化学複合施設の建設プロジェクトである。投資総額は30億～40億ドルとなっている。APEC首脳会議の前日、ウラジオストクでマツダ車の組立工場がオープンした。ここでは年内にもトヨタ車の生産が始まる予定だ。日本の自動車メーカーのロシア市場での積極的な動きを歓迎している。もちろん、「生産の現地化」の大幅な拡大を期待してはいるが。

ウラジオストクAPEC首脳会議は滞りなく開催された。それは、我々がロシア極東の発展を重視していることを、一目瞭然に示した。ロシアは切り離すことのできないアジア太平洋地域の一部である。この地域におけるわが国の経済的プレゼンスがより際立つことを目指している。若者が国内欧州部あるいは外国への転出希望を抱かないよう、ロシア極東住民の生活が保障され、快適であることを、我々は望んでいる。そのためにはまず、若者に興味を持てる仕事をあたえ、例えば、ウラジオストク市のソラーズ工場のようなハイテクで高給の雇用を創出することが必要だ。

近年、日本の経済界の極東での投資協力への関心が高まっていることは喜ばしい。代表的な新しいプロジェクトは、LNG工場の建設だ。LNG工場建設に関する具体的な問題は、近く予定されているガスパロム・ミレル社長の訪日時に協議されるであろう。

極東の農業分野における協力に対する日本経済界の関心の高まりについても指摘したい。これは我々にとって新しい協力分野である。そして、我々は必要な支援はすべて行う用意がある。しかも、このような協力は国際食糧安全保障の問題の解決に寄与する。同時に、極東には広大な休耕地がある。日本のプレスが報道していたが、アムール州だけでも20万ヘクタールの空地がある。報じられたように、賃貸料は安く、1ヘクタール当たり年間120円ほどである。ロシア極東における農地開拓協力に関心を示しているのは中国、韓国、北朝鮮であるが、日本の農業ビジネスが入ることを希望する。幸いにも近年、この分野で北海道が積極的だ。北海道銀行とアグリビジネス業界の代表団がロシア極東を何度も訪れ、プロジェクト第1号がすでに存在する。土地の調査も行われ、土質は北海道に負けないもので、経済的作物（大豆、ソバ等）の栽培が十分可能だという。新潟の皆さんに関心があれば、そのための代表団のロシア極東視察に協力する用意がある。

中小企業の経済連携に積極的に取り組む必要がある。そ

して日ロ両国の経済界や社会を巻き込むような、新しい分野の開拓に専念することが必要だ。最近の政府間委員会の会合が示したように、医療分野での協力も有望だ。医療機器および医薬品の開発・製造等のプロジェクトを作成するための作業部会が設置された。ガン診断分野での協力にも関心もたれている。検診のための医療観光をジョイントさせることも可能で、観光産業の振興に肯定的な役割を果たすであろう。

観光産業の発展のチャンスは大いにある。ロシアでは昔から、日本や日本文化に対して大きな関心を持たれていた。ソ連時代から日本の文化、芸術、映画には人気があった。例えば黒澤明監督の映画「姿三四郎」はロシアの若者に強い影響を及ぼし、数十万人の若者が柔道を習った。日本を訪れた人は皆、満足しており、もう一度訪れたいと思っている。彼らは他の観光客より長期滞在し、よりたくさんのお金を使う。

なんとかして、もっと積極的に誘致しなければならない。もうすぐ、スキーシーズンが到来するが、特に宣伝はなかった。日本に関する番組はまだ少ない。我々もロシア観光の宣伝も考えなければならない。双方向で活動を進める必要がある。

観光交流の成長には、別の大きな問題がある。それは、新潟とロシア極東の間の航空路の問題だ。目下、この問題は活発に検討され、連邦航空輸送庁はヤクーチア航空にハバロフスク-新潟間での営業を許可した。ヤクーチア航空は関心を示しているが、成功するかどうかは搭乗率次第である。さらに、観光産業の発展のためには知識が必要である。互いの言葉を勉強し、ロシアの日本語人口、日本のロシア語人口を増やすような活動が必要である。

成果を出すための方法は数多く存在する。両国の経済協力、交流全体が発展する見込みは十分にある。